

<「知るっば！久留米」 令和3年4月1日（木） 12：30～放送分>

からくり儀右衛門 ～第1回～ 「からくり儀右衛門とは」

<ゲスト：久留米市文化財保護課 小澤太郎さん>

坂本 MC（以下「坂本」）

「知るっば久留米」ナビゲーターの坂本豊信です。

今月は、久留米が生んだ発明王『からくり儀右衛門（ぎえもん）』をテーマに、
彼がどんな人物だったのかお話をうかがいます。

ゲストはこのかたです。

ゲスト：小澤太郎さん(以下「小澤」)

久留米市文化財保護課の小澤です。

よろしくお願いします。

坂本 この番組ではお馴染みの小澤さんです。

最初に名前について確認なんですけど、「からくり儀右衛門」というのは、愛称ですよね？

小澤 「からくり」が名字で「儀右衛門」が名前、なわけないですよ。

よく言われていますが、「儀右衛門」は最初につけられた幼名ではないです。

幼名は、岩次郎（がんじろう）っていいます。

坂本 へー、それは知らなかったですね。

でも考えてみれば、生まれた時から儀右衛門なんて大人の名前がついているわけないですよ。

小澤 菩提寺が管理している檀家さんの戸籍があって、そこに岩次郎って書かれているんですよ。

そして、成長していくにしたがって次の名前、儀右衛門を名乗ったり、

その後、みなさんご存じの久重（ひさしげ）になったりと名前が変わっていきます。

坂本 幼少期は、寺子屋に行ったりしたのですか？

小澤 そうですね。その寺子屋に行ったことが、発明のひとつのきっかけになっているんですよ。

彼のお父さんがべっ甲細工の職人さんだったこともあり、

その背中を見て育ったので物作りには興味があったと思うんですよ。

それで、幼少期に通った寺子屋の話になんですけど、

その年頃の子たちって、現代でもそうですけれど、いたずらばかりしているでしょ？

坂本 まあね、みんな子どもだからね。

小澤 岩次郎の筆箱もいたずらのターゲットになったようなんです。
なので、紐細工の工夫で級友たちが開けられないような筆箱を作ったそうです。

坂本 岩次郎からしたら、してやったりな感じだったんでしょうね。
そこから、からくりの道にのめり込んでいったんですか？

小澤 みんなが筆箱を開けようとしても全然開かない。
でも、岩次郎が手にすると、さっと開く。そこにみんなびっくりするわけです。
岩次郎としては、みんなを驚かすことが快感になり、物作りの楽しさを知ったわけです。
その後は、日々箱細工にのめり込んでいきます。

坂本 よく知られている「からくり儀右衛門」という名前ではばれるのはいつ頃からですか？

小澤 「からくり儀右衛門」は、大人になってからの職人の名乗りでしょうね。
お父さんは弥右衛門（やえもん）ですし、代々「～右衛門（えもん）」を名乗っていたようです。

坂本 儀右衛門さんは、田中久重（たなかひさしげ）という名前でも知られていますよね。

小澤 そうですね。彼が大人になった後、明治からの名前だと思います。
その後、婿養子をもらうのですが、彼に2代目儀右衛門の名を譲って、
代わりに田中近江（おうみ）と名乗ったりもします。
彼は、成人してからもたびたび名前を変えているんですよ。

坂本 発明家と聞くと、ちょっと固そうな性格や変わった人というイメージがわいてきますが、
からくり儀右衛門さんは、どんな人柄だったのですか？

小澤 一言でいうと、「信念と努力、根気の人」でしょうか。
当時は、武士でも職人でも長男が家を継いでいますが、
彼は「私は発明工夫で天下に名を挙げたい」と父親に宣言して、弟に家督を譲ってしまいました。
これは、江戸時代の常識からしたらあり得ないことなんですよ。
彼の頭の中は、いつも新しい物作りのことでいっぱいだったようです。

坂本 そんな儀右衛門ですが、普段はどんな様子で発明に取り組んでいたのでしょうか？

小澤 物作りに没頭すると、部屋に何日もこもって外に出ないとか、一週間ほどの徹夜も平気だとか、
食事に手をつけないこともしばしばだったとか…。
親族の証言で、「久重さんは眠らない人だった」という記録が残っています。

坂本 いやあ、人並外れた集中力と体力ですね。

小澤 久重が遺した言葉に、「人が一度思い描いたことは、成就しないことはない。注意深く打ち込めば、必ず解決する。それができないのは努力不足だ。」という言葉があります。

坂本 天才発明家というイメージを持っていたのですが、やはり大変な努力家だったんですね。よくエジソンも同じようなことを言われますけど、発明家っていう人は、努力家なんでしょうね。

小澤 自分や仕事には厳しくても、実は温和な人柄で、周りの人たちには優しくったそうですよ。

坂本 自分に厳しく、他人に優しい、素晴らしい人柄ですね。なんかそういうエピソードが残っているのですか？

小澤 発明の合間に気分転換に外に出ると、たちまち子どもたちに取り囲まれたそうです。「ぎえもんさん、ぎえもんさん」と子供たちが群がってきて、一緒になって戯れる姿は、知らない人から見ると阿呆（あほう）のようだったという証言もあります。

坂本 他にも、氷を作って子どもたちに振舞ったというエピソードもあるとか？

小澤 幕末の冷蔵庫もない時代に、溶媒を使って氷を作る機械を発明したそうです。

坂本 氷を作る機械を発明したんですね。

小澤 当時、季節外れの氷は珍しい物なんですよ。なので、真夏に製造した氷をお殿様に献上したんですが、同じように近所の子どもたちにも氷を配ったそうですよ。当時の人々にとっては、本当にびっくりしたことでしょね。「真夏に冷たい氷を食べた」という証言が残っていました。

坂本 それは、子供たちの人気者にもなるはずですよ。久留米市にも「からくり儀右衛門」が遺した人形があるそうですが、そのことについてお話していただけますか？

小澤 からくり儀右衛門が制作したとされるからくり人形は、現在、世界で5~6体確認されています。そのうち、今でも動く「弓曳童子（ゆみひきどうじ）」と「文字書き人形」の2体を所有しています。

坂本 実は、私もこの2体は知っています。以前、広報久留米の表紙に使用したこともありますので。

小澤 これには金属製のゼンマイが使用されていて、
1回巻くとゼンマイの駆動力を使って腕や顔など色々な所が同時に動くんですよ。
要するに、動力はゼンマイですが、これを電気に変えれば、現在のロボットと変わらないわけで、
まさに現代のロボットの原型なんですよ。

坂本 当時の技術は今ほど発達していないので、儀右衛門さんが全ての仕組みやシステムを考えて、
それをゼンマイというシンプルな動力で動かしていたということですね。
しかも、それが久留米に2体あるということですね。

小澤 1体は、「弓曳童子」といって、自動で弓をかまえて、矢を取って打つからくり人形です。
もう1体のからくり人形は、「寿」とか「松」とか「竹」の文字を書くんですよ。
これもすごくて、実際に書いた文字がまた滑らかなんですよ。

坂本 これはもうロボットですね。

小澤 もうロボット技術のプロトタイプですよ。

坂本 どちらもぜひ大事にしたい久留米の宝だと思います。
文化財保護課の小澤さん、興味深いお話をありがとうございました。
次回は、からくり儀右衛門こと田中久重が、久留米で過ごした青年時代についてのお話です。
おたのしみに。